

## 「木は地球を救う」 — 5 創生フォーラムin東京

細田木材工業(株)  
相談役 細田 安治

このところ続けて、「木は地球を救う」のセミナーに参加した。3月31日には「平成29年度創生フォーラムin東京」に参加、同日夜間にJID（日本デザイナー協会）主催の「木育」を聴講、4月21日「国際森林デー」と連続参加した。木材教祖を自任？する筆者も「これでもか」「これでもか」と洗脳を受けた。更に、ドキュメンタリ映画「うみやまあひだ」を観賞した。この映画は4度目、観るたびに新たな感動を覚え、ますます木材教にのめりこんでいくもう一人の自分を発見した思いです。今回は「創生フォーラムin東京」のなかで神奈川県川崎市長福田紀彦氏の「木材利用を通じた原産地と消費地との連携」をレポートします。

	人口（千人）	生産高兆円	面積	産業	イメージ
神奈川県川崎市	1,500	川崎市5.3	1,400km <sup>2</sup>	大企業、研究所サービス業	工業
宮崎県宮崎市	400	宮崎県3.2	643Km <sup>2</sup>	農業、林業、大企業	林業

神奈川県川崎市は、全国のGDPの約520兆円の約4割を占める首都圏にあり、市内のGDPは約5.3兆円の大都市だ。企業の研究機関も約400に及び研究者や技術者が多い。また近年ハードの工業都市からソフトの技術都市へ更に研究者、技術者などの所謂専門家により高度な仕事へのニーズが高まり長い通勤時間から解放するため住宅がつくられ職住近接都市へ変貌している。

### ◇年齢3区分別人口構成比

	年少人口0～14歳	生産年齢15～64歳	老年人口65歳以上
川崎市	12.8%	67.7%	19.5%
全国	12.6%	60.7%	26.6%

生産年齢は、全国平均にくらべ11%多い。と言うことは、働き手が多く頼もしい地域だ。

そのため、市民の住環境改善のため、生活に潤いをもたらす木材へのニーズが高まっている。

◇一方宮崎県の現状は、林業が有名で杉の生産量は全国一を誇っている。即ち森林面積は約59万ヘクタール全国では12番目で、県の面積の約76%を占めている。そのうち人工林23万4千ヘクタールを擁し、有名銘柄の**び**飴肥杉は油分が多く粘り強いのが特徴である。林業従事者2,690人である。

宮崎市は宮崎県の県庁所在地として杉丸太生産量日本一で充実した資源を有しているが、個の資源をいかに有効に使うか。充実した活用法が求められている。林業県の特徴を生かし平成25年より「木材産業日本一」としての地域特性を活かす取り組みを始めた。

#### ◇川崎市は木材利用、宮崎市は消費ポテンシャル

宮崎市にあって川崎市にないもの。それは木材だ。木材を取り入れどうすれば使えるか使い方の工夫をしよう。宮崎市にはないものは何か、お互いに工夫して取り入れよう。

◇2つの市が得意分野を生かし交流をしようと平成25年に提携した。

#### ◇仲介コンサルト

宮崎県木材利用技術センター所長 <sup>ありまたかのり</sup>有馬孝禮先生は、木材を住居に使用すれば自然と共生する最適な生活ができる。有馬孝禮先生に宮崎市と川崎市の橋渡しをお願いした。有馬先生は「木の効用住居に使用すれば最適」であり「自然共生型」の生活を提唱している。地球温暖化を招く二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の削減などから、日本の森林を見直す機運が高まっているが、国産材を積極的に使うべき理由はそれだけではない。体と心の側面から、「暮らしに木を取り入れよう」と木材の効用を説いている。余談だが、筆者は有馬先生を師匠と仰ぎ勝手に弟子を自任している。ここで有馬先生が出てきたのは有馬教信者？として嬉しい限りだ。

・川崎、宮崎両市長、市役所、有馬先生、地域の木材、建築関係者そして地域住民から選ばれたボランティアが参加し平成25年にスタートした。

・事業としては、両市の相互訪問から始まり当初暗中模索ながら、両市の近未来のモデルとしてテーマを決めた。

#### ◇川崎市では街づくりのモデル

1. 国産材を生かした豊かな街造り
2. 活力ある産業
3. 新しい未来の創造

◇都市フォーラム(公開討論会)を宮崎県で行い有馬先生の講演からスタートし木材利用施設、宮崎県産木材利用の事例などを視察、交流がスタートした。

川崎市からは設計事務所、建設業約30人が参加、宮崎の幼稚園、中小学校、有名な宮崎産木材を使用した木造ドームの、木の花ドームへは25人が参加、「木の効用」への認識を深めた。

◇川崎市側では、宮崎県木材産地と提携、川崎と言う立地条件の中で使えるものとして、ショッピングセンターのショールームやショップの陳列棚、ゴルフ場では、クラブハウスの家具などに使い始め、少しずつ実績を積み上げた。

平成29年3月住宅供給公社や、市の集会所に可能な限り、木の床、木の壁、木のおもちゃなどを取り入れ、市民に木に対する関心を高める活動を精力的に行った。このような運動の成果があがり、近隣の住民から「木は良い」との認識が広がってきた。

川崎市でも負けじと市長の応接室に木材を採用、更に川崎市の木材技術者を育成するため木材マイスター制度を採用した。

◇川崎市の小学校建設に当たり、木造とRC造りのコストを比較した。試算によれば、2階建て建築面積

690㎡、延べ床面積1200㎡、RC造1億円、木造1億9百万円と出た。ここで木造は9百万高くつくが、基礎工事が短縮できるので、全体の工期が短縮されるメリットありと言うことが判った。更なるメリットは、RC造りのアルミサッシから木造化へのコスト比較と居住性の探求も進めている。

更に、宮崎市と提携して、地域活性化のために、

◇木育イベントとして

①保育園遊具に積み木を

②武蔵小杉の上並木公園、木を使い地域コミュニティを活性化した

◇木づかいリノベーション推進事業として、既存のRC5階建てビルの内部は<sup>おびすぎ</sup>飢肥杉を可能な限り取り入れた。

1階 木工加工機械を据え付け木材の簡単な加工ができるようにした

2階 卓球ルーム

3階 コーチングルーム

4階 キッズルーム

5階 イベントホールの内装

◇保育園の木質化に向けた材料、設計提案を募集

◇新設小中学校に一平方メートル当たり0.02㎡木材を使用する基準が設けられた。川崎市では小学校4校建設予定である。武蔵小杉小学校では木質化量17.529㎡、木質比率0.02㎡を使用する予定である。木質比率は従来の1.5倍となる。

◇2023年までに、木をふんだんに使った温もりのある市役所に建て替える。

◇地方創生推進交付金300万円は子供だけのためのDIYショップを予定している。

◇地方創生フォーラム第2弾として今号では、宮崎市と川崎市の事例をレポートした。宮崎県の木材を、発展著しい近代都市川崎市の居住環境の改善に役立てよう。ビルをリノベーションして内部を木質化する。

◇日本の未来を担う子供たちの居住環境を改善、Wood-Educationとして教育にも木の良さを使い、極め付きは、市役所を木造に建て替える壮大な計画、この川崎市長には木材教として最大限の敬意を表す。このような自治体の長が日本全国のあちらこちらから出てくることを期待する。

続く